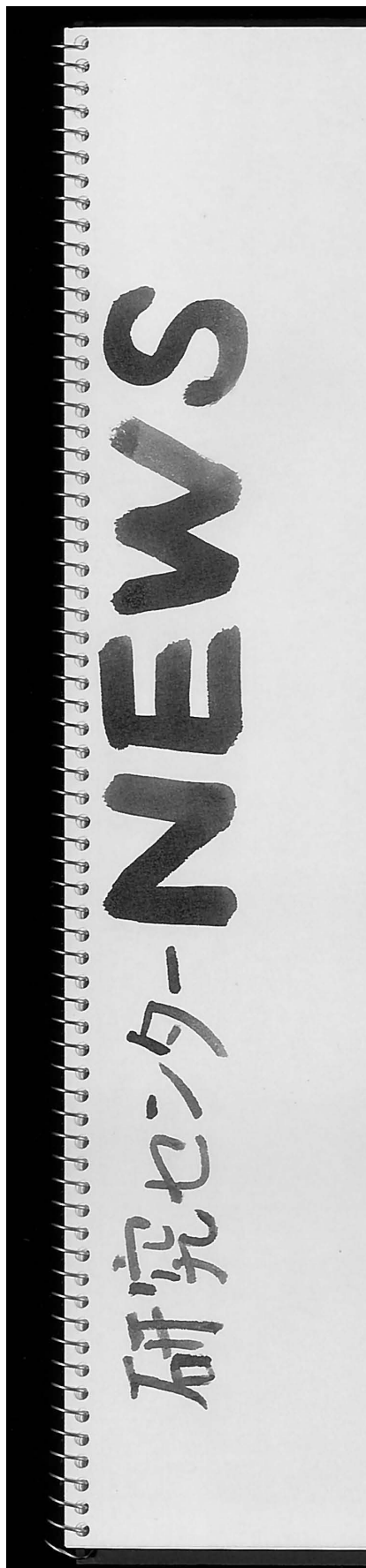


研究センターニュース第93号



NPO地域と協同の研究センターのこれまでから「協同の未来」を考える

1995年に設立した地域と協同の研究センターは今年15周年、2001年のNPO法人化から10周年を迎えます。記念企画として来年3月12日に開かれる東海交流フォーラムでは「現場から協同の可能性を問う」をテーマに、組合員・住民や職員が、現場で直面する課題に光をあてながら「協同」への可能性や展望を探ります。東海地域の農協、医療生協、大学生協、地域生協、社会福祉法人の報告と参加者の実践交流で、「協同」への可能性や展望を話し合います。

2012年「国際協同組合年」まで3年かけて「地域と協同」の未来を探っていますが、研究センターニュースも「協同の未来」を考える場としていきます。第一弾として研究センター設立に深くかかわってこられた、初代事務局長の橋本吉広さんと初代研究センター長の野原敏雄先生に、創立からのあゆみとともに「協同の未来」への問題意識を伺いました。（向井忍）

橋本吉広さん 地域と協同の研究センター理事

大学非常勤講師（協同組合論、NPO・NGO論、入門ボランティア、老人福祉論）

研究センター創立の頃の時代背景は？

* 1980年代の大型店問題を考える会で地域・まちづくりを考える実践と1992年に開かれたICA東京大会を記念して東海シンポジウム（まちとむらと協同組合）を開催した東海の協同組合関係者と研究者・市民の力で、設立準備会が開かれて設立されました。東海3県の生協連帯の場であった東海コープ協議会を足場にしていました。

この時期、全国でも研究組織がつくられましたが

* 1980年代は札幌、東京、横浜、神戸、福井など各地で生協を母体とする研究組織が立ち上がっていました。ICA東京大会では日本の生協の班（HAN）が注目されましたが、日本の生協自身は、共同購入の成長率低下が始まっており「転換期」として次の段階を模索していた時期です。

* 東海の生協も「生活協同センター」構想を掲げた実践を始めていましたが、事業や組織の実践とは別の場で新たな生協づくりや協同組合のあり方を考える場として研究センターが設立されました。

「地域と協同」という名称になったのは？

* 既存の協同組合だけでなく「地域」でうまれているもっと広い「協同」組織とつながって主体をつくっていきこうという思いからでした。

生協を基盤にしつつ、NPO法人化しましたが

* 研究センター設立の翌々年1997年に東海コープ協議会は解散しました。東海3県の生協の単協主権で連帯を再構築するためでした。その中で2001年にNPO法人化したことは、研究センター自身の基盤をつくる模索であったと思います。

NPO法人化後の特徴を挙げるとしたら？

* NPOの基盤はそれを担う会員（市民）ですが、その点で考えると2005年頃から4つのパネルとフォーラムが活発になったことが大きな特徴です。研究者主体でなく会員が担う研究センターの組織として大切な場ではないでしょうか。

*（食と農、環境、地域福祉、職員の仕事を考える）

特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

これからの研究センターの役割については？

* 地域のなかの新しい協同を束ねて広げていくことですね。私が調査している「小規模多機能事業所」を例にとると制度の下でつくるだけでは宅老所活動にあった活力をうみだせていません。NPOたすけあい佐賀では市内8か所の宅老所があり、独自にリーダー養成をして後継者を育てながら、地域事業として広げています。新しいものを生みだす新しい発想で、一歩ごとの知恵やエネルギーを紹介することです。地域と協同の研究センターも知識の力だけでなく感動から行動の力を生み出せるセンターとなることを期待します。

会員主体の研究センターならではの課題ですな。

特に注目している実践や地域はありますか？

* 「自助・共助・公助」といわれますが、これに対し「協同」は自助の創造であると考えています。現場における協同の実践で私が関わっているのはワーカーズという働き方での自助の創造です。高蔵寺ニュータウンでは住民自身のまちづくりの事例が始まっています。

これからの協同組合へのメッセージを

* 既存の協同組合から創造の課題へ挑戦するには、新しいものをどう育てるか、胎内から生まれているものに気づく着眼点が問われます。「大きな協同」のパートナーとしてのネットワークの組織化など、生協運動のなかのパートナーシップを発揮していただきたいですな。（12月10日取材）

野原敏雄先生・地域と協同の研究センター顧問 中京大学 名誉教授

野原敏雄先生が準備されている近刊「友愛と現代社会」の基調はどのようなものですか。

* 大きな社会経済の変換期ではよほどの変化をしないと生き延びられません。どこに還るかが大事ですが、協同組合という組織の重荷があるとグローバル社会への模索についていけない。孤立・無縁・先の見えない社会に対し新しい社会の条件への見方・対し方を理論的にも変えないといけません。そのあたらしい見方が「友愛」です。

協同組合にとっての難しさとは。

* 協同組合がどう変わっていくか。「協同」ができたときにはくらしの感情や感性的なものが生きています。そこからつくりなおさないと時代変革に対応できないでしょう。協同組合自体では難しい、中に入り込むと重い課題ですが離れた組織でも難しい。研究センターと

いう自由に発想できる特性を生かせると有効ではないでしょうか。

協同組合のロマンということでしょうか。

* 感性ですな。友愛はロマンでなく日常的な繰り返しのつきあいであつた相互信頼です。ロマンはそれを飛び越えた夢です。研究センター設立の頃フランス革命200年祭から戻って、設楽で「自由・平等・友愛」の3つの原理にふれました。

1789年大革命のときには、友愛の言葉はありましたが、自由と平等・自由に行動することで平等であるという自由の宣言でした。その後、フランスの経済社会で格差が進み、それに対する抵抗で政権がめまぐるしく変わります。1848年2月革命でサンシモン・フーリエのロマンが登場し、友愛が人権原理として位置付けられ、1848年11月の共和国憲法前文で再び自由・平等・友愛が明文化されます。社会が大きく変わって20・21世紀に「社会的経済」として大きな力を持つようになっていっています。それを「友愛と現代社会」の第二部で展開しています。

それが協同組合の思想的な基礎になっている

* 協同組合がイギリスでできるのは1844年、先進社会なのできちんとした組織に至りますが、フランスでは思想的に協同組合の基礎が作られています。社会の中で友愛が持つ重要さは明白です。フランス大革命で「中間組織」が否定され、あるのは村のなかの酒場や祭りの小さなグループ。その力があつまってブルードンの社会主義革命がでてくる。それはもっと評価していいのではないか。フランスの19世紀後半は研究対象になってもいい気がします。ナポレオン3世の政治で埋もれていますが、一定の人民の権利を認めざるを得ない展開となった力が友愛ではないか。それが力になって協同組合がつくられます。

* 20世紀の協同組合は既存の組織との対抗で、一番大事なことが抜けていないか。これをはっきり言ったのはレイドローです。レイドロー論文は歴史的にも意味を持っていたはずが、それが十分ふまえられないまま本体の協同組合組織が動いているという協同組合の性格の把握。それを協同組合の中の人によって整理してほしいですな。

研究センターでできることは

* 研究センターもそこまで深める部分があってもいいのではないのでしょうか。協同組合の本来のあり方を深め広く社会化する役割です。だからこそNPOである意味があります。協同組合の中だけであればNPOの必要は

ない。外に広げ社会の財産にする、ほかの組織もその財産によって変わっていきける契機にする。それをNPOの研究センターはやれるのではないか。

*「友愛と現代社会」でもそういうことを言っています。社会の崩壊しそうなきそれを押しとどめるものが現れる。前半で友愛に関わる4つの物語を紹介していますが、ボトムアップのもので、理論的・理性的な理念にまとめるとそれを軽くみてしまう。簡単に連帯というのでなく、それがどういう友愛の感性をとおしているかを具体的に大事にしながら連帯を考えないと力になりません。

研究センター設立をいまからふりかえると？

*協同組合は素人の私が最初に協同組合にふれた論文を書いた時、田邊さんを訪ねました。当時のめいきん生協の活動は地区で自立させるという考えを持っていました。友愛の関係が生きる範囲の組織が地区だったのでないでしょうか。それとレイドロー論文がつながりました。こういう形で協同組合がつくられるなら展望はある。日本は班があるので発展している。もう一面では形態としての生協のあり方があり、それがないと競争社会では維持できません。

*レイドロー論文がでてICA東京大会が開かれ、学会でもそのようなことが強調されていました。ところが、ICA東京大会が終わると実務的課題が一挙にできました。その大事さはわかるのですが、その中にレイドローの考えが導入されないのはなぜかと思っていました。その空気のなかで研究センターがつくられました。強調すると生協も変わっていくかと思いをもちましたが強調するほど疎外されていく。しかし橋本事務局長の努力もあって研究センターが社会的な評価をうけ自治体の事業受託など広い層がつくられてきました。



野原敏雄先生

NPO法人 となった研究 センターは

*それがNPOをつくる直接的なきっかけになっている。これが生協のあり方

だという態度を突き進み、あのままでいくと研究センターと生協本体は離れちゃったと思う。橋本さんはそのような生協の中の事情を考えながら会員が主体になる研究センターをすすめた。2001年以降田邊さんが理事長になって、東海交流フォーラムが始まったのはそれを真正面から掲げたということです。

*フォーラムでは必ずしも会員が主体でない「新しい生協はこうあるべき」という議論もでていましたが、徐々に看板に掲げたような多様な会員が主体的に参加するようになってきました。財政的には生協が研究センターを支える組織論と同時にフォーラムがあった。そのことで生協とのつながりは強化されましたが農協との関係や協同組合間協同、地域の協同の仕組みをもつ中小業者等のつながりは弱まりました。そういう中、自分が背負っているにもかかわらず生協以外も参加する研究センターに力をいれている生協はさすがです。

日々繰り返される人と人の関係が大事ですね

*そこからどう飛躍できるかが社会のリーダーの役割です。コミュニティは地縁社会を引きずったもの。今あたらしいコミュニティができているのはと「友愛と現代社会」の中でふれています。外に解放された、個人の自由な発言・交流ができてい「地域文化」という言葉で表現しています。

生協でも地域と進める事業が始まっています

*生協もそういう性格をもっている。新しい事業形態も「地域文化」としての見方は可能でないでしょうか。新しいコモンズのひとつです。生協が新しいコモンズを育てる力を持っていることが大事であり貴重だと思います。

ありがとうございました。「友愛と現代社会」の出版を楽しみにお待ちしております。

(12月15日取材)

(この記事はお二人へのインタビュー - をもとに、向井の責任で構成しました。)

地域でのつながりを追う 第7回東海交流フォーラムに向けて

3月12日(土)に開催する、設立15周年・NPO法人化10周年記念企画第7回東海交流フォーラムは、地域での協同・たすけあいの実践と成果・課題を持ち寄って、「協同っていいかも...」「協同っていいね...」と語り合う場にしたいと実行委員会で検討・準備をすすめています。研究センターNEWSでは、それに先駆け地域での実践に迫ります。

山のくらしを支え合う 若者と共に地域力を高めて

コープあいちで、北設楽郡東栄町東園目への配達が始まるといううれしい第一報が研究センターに届いたのは、会員の前澤このみさん(コープあいち組合員・新城コープ委員・新城市在住)からでした。

その前澤さんと、コープあいち新城センター長の竹内章さんと一緒に、配達をしている小林純子さん、配達をいつも待ってられる久田暢子さんをおたずねしました。

北設楽郡東栄町

「花祭り」で有名な東栄町は、四方を山に囲まれた人口約4,000人ほどの小さなまちです。町域の約91%が山林・原野で占められており、標高700~1,000mの山々が連なっています。豊橋駅からJR飯田線で約90分、東名高速道路豊川インターチェンジより車で約70分です。東栄町内には、町の中心部 本郷に小さなスーパーが2



山道は、すれ違いもできない所もあります。譲り合いの精神で。

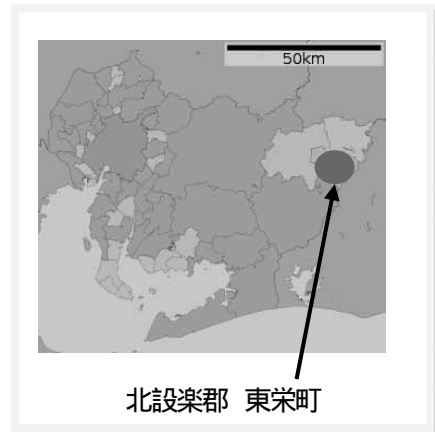
軒あるだけで、コンビニは1軒もありません。つい最近まで、携帯電話も圏外になることが多かったそうです。かつて町の人々にお世話になったという方が週に1度、車に生

鮮品を積んで移動販売をしておられます。その中でも東園目は、さらに山奥にあります。

コープあいちの新城センターのパート職員が、組合員さんから「東栄町東園目の方々が買い物に困っているから配達できないか」ということを聞いたのが2年前です。東栄町行政からも、相談を受けました。愛知県の山村振興室が奥三河の調査に入ったことも、大きなきっかけとなりました。生協としても検討を重ねていましたが、昨年12月、邦楽集団「志多ら」の新城公演の実行委員会に当時のセンター長の久保田さんが参加したことがもとで、新たな展開を迎えました。「志多ら」のスタッフがサポーターとして地域の方にお届けするという仕組みが成立したのです。

邦楽集団「志多ら」

「志多ら」は、和太鼓・篠笛を中心に演奏活動をしているプロの和太鼓集団です。全国各地でコンサートの開催、各種イベントでの演奏、ワークショップの開催など、様々な活動を行っています。



北設楽郡 東栄町

「志多ら」の活動拠点は、東栄町東園目の元東園目小学校です。メンバー17名と研修生が廃校になった小学校を借りて練習を重ねています。そのきっかけは20年前、練習場所を探していたメンバーが、前澤さんと出会ったことでした。太鼓の練習は場所も要りますが、大きな音を出すので周りの環境とそこで暮らす人々との関係がたいへん重要です。「人を結び、いのち奏でて、伝統を舞う」という「志多ら」の若者たちの心意気に共感した町の人々は、よそものである彼らをあたたかく受け入れ、見守り、そして交流が始まりました。遠くの子どもたちよりも、近い存在になった彼らの「志多ら舞」を、国の重要無形民俗文化財の東栄町東園目「花祭り」奉納するように言ってくれたのは、当時の区長さんでした。

村の役にも出て、草刈りもし、夜間の練習は太鼓に毛布をかけて周りに気遣う若者たち。17名のメンバ



花祭り

一に誰ひとり東栄町出身の人はいないのですが、20年という年月が経ち、彼らの子どもたちが東栄町で生まれ東栄町で育ち、花祭りの舞いの練習にも熱心だといえます。東栄町の中でも陸の孤島と言われる東園目、そこに子ども達が増えているそうです。

地域でくらすために力を出し合う

「ただ太鼓をたたくだけではない」と言う「志多ら」の小林さんは、「知り合った方々とどうつながるかが大事」と言います。その一環として、地域の住民、外部の支援者を交えてNPO法人「てほへ」を今年5月に設立しました。行政や企業、学校とも協力し合いながら、花祭り、さんさ踊り等の伝統芸能やチェンソーアートなどの活動支援、旧東部小学校区(東園目、下川区など)における廃校などの利活用に向けたランドデザインの構築と、それに基づいた山里づくり等の活動の支援・実施、町づくりの活動支援、情報発信活動などに取り組んでいます。その「てほへ」のメンバーが、コープあいちの配達をサポートをしてくれています。今は子どもが小さいなどの理由のために、演奏活動は休止し事務スタッフをしている方々です。



「志多ら」の練習場
元東園目小学校の教室

家が離れすぎていて個別配達もできない地域で、1軒1軒のお宅を回って生協を知らせ、説明会もしました。12軒のお宅が生協に加入し、毎回12~14人の利用があるそうです。普通の説明会では信じられないことですが、「本当に来てくれるのかん?」「ありがたいなあ」という声があがりました。

「冷蔵庫がからっぽになってくると不安だったけど、明日生協の商品が届くと思うと安心!」

トラックは新城の配送センターを9時半に出発し、11時少し前に「志多ら」に到着します。その後、トラックは他の班への配達に向かいます(公衆電話と自動販売機の位置はしっかり確認済みです。弁当は必需品です。)が、「志多ら」では、仕分けをして、軽自動車小林純子さん達が配達に出かけます。利用が多いと一度に積むことができないこともあるそうです。夏場はビールやアイスクリ



コープあいち 新城配送センター

ムで車がいっ

ぱいになります。帰省されるお孫さんのためにお菓子をかう方もたくさんおられました。アイスクリームが届くことがうれしくて、「志多ら」では冷凍庫を買いました。予約商品も多く、卵や牛乳やヨーグルトなど確実に増えているそうです。

山間地配送の可能性を地域の人と一緒に探って

現在センター長の竹内章さんは言います。「このみなさんが待っているのはモノだけではないんです。」もともと、コープあいちの前身であるみかわ市民生協にはJSS(ジョイントサポート



竹内章センター長

システム)という仕組みがありました。拠点までトラックで配送し、サポーターさんが仕分けをし、各家庭にお届けするというものです。この仕組みは、こういう山でこそたいへんな力を発揮します。大きなトラックで配送出来ないところへも、小回りのきく軽自動車で出かけることができます。地元の人同士のつながりも強いので安心して商品を頼むことができ、いろいろな要望や想いも伝わりやすくなります。サポーターさんがいなくなったら届けられなくなりますが、東園目では、NPO「てほへ」が組織的にバックアップしてくれているので、その心配はなくなりました。生協も事業をしているので、赤字を出すわけにはいきません。その上いったん始めた配送は、生協の都合でやめることはできません。地域にくらす人々の協力の力が、この山間地配送を可能にしました。「収支報告もしっかり経営会議に出しています。」と竹内センター長は言います。「ここでの事例を山間地配送の皮切りにする。そのためには、他にコースが組めること、これからのモデルケースにできることを考えた。」とも言われました。その折りに、競合に泣く小売店のないようにしたいという配慮もありました。地域の要望、地域の判断等、タイミングもよかったとのこと。組長さんや区長さんのもとへ、毎週通って話したという竹内さんの熱い思いが受け止められたこともあるでしょう。

サポーターである小林さんたちも、生協を信頼し、たくさん利用をされています。小林さんのお母さんは、めいきん生協(当時)の組合員で、小林さんは生協商品で育ったそうです。脈々と生協はつながっている、そしてつながりを育んでいるということを感じました。東栄町では、小学校は統廃合されて1校になりました。子ども達はみんな、町営バスで小学校へ通います。保育園の送り迎えが要らなくなったお母さん達は、わざわざ買い物にだけ出かけることがなくなって助かったと、生協の商品をたくさん利用しています。「お世話になっている地域のみなさんに恩返しをしたい。地域に貢献したい。」とい

う想いが「志多ら」を育て、「てほへ」を生みました。小林さんが母のように慕って頼りにしている前澤さんが、たいせつに育んできた絆も実に温かいものです。

お仲間が集まると、生協商品のことが話題になります。アトピーのお子さんを抱えて苦労しているメンバーもいます。卵と牛乳を使わないクリスマスケーキが商品案内にあって喜んだら、12月24日に新城センターに取りに行ける方限定の企画で、残念だったとのこと。この話に真剣に耳を傾けている竹内センター長を見ながら、近いうちに、そんな要望にも応えられる生協になるのではないかと思います。

みんなのおかげ

小林さんが商品をお届けしている久田暢子さんは、80

歳でおひとりぐらしです。ご主人は入院中で、近くに娘さんがいるそうです。とても元気な明るい方で、初めてお会いするにもかかわらず、にこ



久田暢子さんと石川純子さん

やかにお話をしていただけました。手芸がお得意で、おたずねしたときも、編み物をされていました。通された部屋のこたつには、お手製の色鮮やかな温かいカバーがかかっていました。

心づくしの手作りの昼食をいただき、太鼓の練習の音に見送られて、車に乗りました。20歳の研修生のお二人は、たいへん礼儀正しくもてなしてくださいました。「携帯電話を持たないことで(研修期間中は「携帯電話禁止」です)、かえって大事なつながりがわかるようになった」「太鼓が大好きで中学校のときからやろうと決めてきた」という頼もしい若者たちです。

午後3時を過ぎると、もう日が陰り、すれ違う車もなくなります。うっそうと茂る木々に囲まれた道を、帰りは静岡回りで下りました。初めての冬を迎え、これから雪が降るとますます配達はたいへんになります。「坂道に登れないときは、下からみんなで運ぼう。若い研修生もいるし、人手はあるから大丈夫！」と言われ、地区担当の清水さんは感動したそうです。

地域のくらしを地域の人々で支え合う、素敵な方々に出会うことができ、心が温かくなりました。そのとき生協がちょっとだけお役にたてているというのは、とてもうれしく思いました。

地域と協同の研究センターは、困難なことがたくさんある中、心温まるつながりを紡いでいるの方々をつなげ、フォーラムを通して、地域力を紡いでいく元気をみなさんにお届けしたいと考えています。

農山村でくらしを支え合う協同の営みを、これからも追いつけていきます。会員のみなさんの身近な情報を、ぜひお寄せください。

(取材・文責:伊藤小友美)

「生協でたのんだものは、帳面に書いているよ。持ってきてもらえるので助かっているなあ。時々孫(高校生)のお弁当のおかずの冷凍食品もたのむよ。天気の良いときには、なるべく歩くことにしているけど、郵便局や農協まで行くときには、いまだにオートバイにも乗る。道沿いだもんで、知り合いが車に乗せてくれて「とうえい温泉」にも連れて行ってくれる。みんなのおかげでここでくらすと思っているよ。もう50年以上ここにいるから、よそへ行きたいなんて思わないね。」



前澤このみさん

行政とも、他の団体とも、農協とも一緒に

愛知県の地域政策課山村振興室では、山村地域の買い物調査を行っています。生協へも相談が寄せられています。行政と一緒に、山村のくらしを考えていますが、そのときにその地域に住む人のつながりや行動力が重要です。東園目では、「志多ら」のメンバーの力があって、配達が可能となりました。西園目は、もっと厳しい地域です。「西園目からも作手からも要望はありますが、地域の方や農協とも一緒になって考えていけるようにしたい」と、竹内センター長の想いは膨らみます。力強い味方である前澤さんも、「また議会の傍聴に行こう。」と熱心です。今後の取り組みに大いに期待したいと思います。



研究センター理事からのメッセージ

地域と協同の研究センター理事会では、2010年度理事会の冒頭で、各理事から、地域と協同の研究センターに対する期待や、それぞれが取り組まれていることなど紹介し合っています。今回はその一部を紹介させていただきます。

**生活環境・地域の問題としてのアスベスト
- 軽視できないその健康リスク -**

久永直見理事

愛知教育大学の久永と申します。専門は産業医学で、働く人の健康と安全を守るという予防分野が専門です。1980年頃からアスベストの問題について調査研究をしています。アスベストというと、たくさん患者さんは出ていますが、過去のことで考えている人が多いと思います。実は、そうではなく、今も新しくアスベストを吸い込んでいた人がたくさんいるということを今日は紹介させていただきます。

私がアスベストの問題に関わったのは、自動車のブレーキとかクラッチをつくってみえる小さな工場を見に行ってからです。通常は純正品が売られていますが、鉄の部分は再利用され、リユースして、それに新しいアスベストのライニングという部品をつけて、再生する工場をやってみました。工場の従業員が別のことで来まして、アスベストを使っていると聞き、それで工場を見に行きました。それがアスベストに関わるきっかけとなり、30年経ちました。最近、クボタショック以来、アスベストの問題が広く国民にも知れ渡りました。2006年から2009年までの間に、日本全体では1万1千人くらいの方がアスベストによる労災と認定されており、又は労災がとれない主婦とかそういう人で認定された人も含めると1万2千人くらいみえました。アスベストは主に職場の問題ですが、一般の市民にとって問題でないかといえばそうではありません。生活環境で石綿に接する機会は、かつて広くありました。生協も昔石綿金網を売っていた時代もありました。石綿製品は、禁止されて新たなものはありませんが、昔つくられたものは今でもあります。特に今問題になるのは、建物の解体です。あちこちで割と大きな建築物をバンバン壊しています。見たところ、石綿も入っている建材もあり、周りの家に飛んでいっているという状況があります。生活環境の問題で忘れていけないことは、アスベストを含有する蛇紋岩の問題です。愛知県では新城から渥美半島にかけて、三重では志摩半島に広く分布しています。そういうところでは、農業をしている人も、蛇紋岩は風化して土になりますので、田畑を耕して吸い込むことがあります。アスベストの問題は終わった問題ではなく、現在進行形の問題です。生協でも組合員に適切なアドバイスができたらと思います。

地域と協同の研究センターに期待すること

岡田祐成理事

社会福祉法人なごや平和福祉会の理事・施設長をしています。社会福祉法人でなぜ地域と協同の研究センターに関わっているのかと申しますと、私どもの社会福祉法人は、母体が高齢者協同組合でして、この高齢者協同組合の母体は労働者協同組合です。私の出身も、愛知労協です。

なごや平和福祉会は、コープあいちとも一緒に愛知の在宅福祉サービス事業者懇談会をつくっています。そこで、名古屋市との懇談や調査事業をしています。昨年度は、厚労省からの委託事業で、介護労働の雇用改善推進委託事業というのを受託し研究センターにもご協力いただいて60ページくらいの冊子をつくり、名古屋市内の在宅福祉サービス事業所の管理者への調査を行い、介護職員の意識調査もし、厚労省に提出しました。名古屋市と私ども在宅福祉懇との懇談会も設定しています。研究センターの活動があったからできたと思います。

最近、私どもがやっている配食事業で、高齢者のみなさんの安否状況を確認するというのが、社会的にも見直されてきていて心強く思っています。この部分をバックアップする研究センターでの研究成果が出せないかと思っています。研究センターへの最大の期待は、貧しさからの解放を、どう現実のものとして支えていくのか、これが協同組合の原点であると同時に、研究センターの原点でもあると思います。

2番目に、研究センターは共に学ぶ場と言われますが、教育機関であってもいいと思います。研究センターは、組合員教育というのが原則にもあり、教育を実際に担う機能があっていいと思います。

3番目には、研究センターを担っている人、協同組合運動を担っている人も高齢化しています。その中で若い協同組合研究家をどう育てるのかということも考える必要があると思います。協同組合人の若返りが図れるような機関、協同組合研究について若い人のモチベーションをつくれるような機関であるべきだと思います。この3点が私の研究センターへの関心です。

「コープぎふの森・関」の森林整備活動を体験してきました！

これまで地域と協同の研究センター環境パネルでも、森林が果たす役割は大きなものがあることを考え合ってきました。全国的に民間企業による森づくりが広がる中で、コープぎふが創立10周年となる粘土に、森づくりをすすめてようと岐阜県の「企業との協働による森林づくり」に参加し、森林整備活動を始めました。今回環境パネルでは、まず世話人でこの「コープぎふの森・関」の森林整備活動に参加してみようと相談し、11月20日（土）4回目となる森林整備活動にコープあいちから3名、コープみえから1名、研究センター事務局2名の計6名で参加させていただき、体験させていただきました。今回はその様子を紹介させていただきます。



参加者はまず朝の9時に名鉄鵜沼駅に集合し、そこから集合場所の上迫間公民館を目指します。土曜

で道が空いていることもあり、順調にいけば20分弱で到着です。ただちょっと道を間違え10時の開会式直前の到着になりました。

10時から、紅葉に囲まれた大岩不動手前の公園で開会式です。地元の森づくりの会や、中濃森林組合の方、コープぎふ佐藤専務からの挨拶の後、手順の説明があり、終了後、一旦車で上迫間公民館へ移動し、そこから「コープぎふの森・関」まで歩いて向います。

作業は3班に分かれ、森づくりの会や森林組合の方から指導いただき、徐伐の作業を行いました。上っていく道も、この「コープぎふの森・関」を取り組むことになり、歩けるようにした道とのこと。まわりは雑草がしげり、森の中に入ると薄暗さを感じます。そんな山道を、これは山柿でこのままだと渋いが、塩漬けにして食べるとおいしいとか、この雑草はなににないで、このキノコは食べることができるとか、森づくりの会の方の説明を聞きながらの道中は、何か新鮮さで、ワクワクしてきます。

11時ごろに、除伐の作業をする山の中腹辺りに到着です。

見渡すと、以前の整備活動で一部先の見通せるところ

もありますが、ほとんどが自然のままに種子が散らばり、自由に伸びた木々が茂り、薄暗がり広がる森です。これで、私たちが少し作業するくらいで、何か変わるのか、そんな不安も抱きながら、一時間ほど、ひたすら12時まで、お借りした新品のこぎりで徐伐の作業を行いました。30分ほど、手近の目につく低木を切っていくと、少しずつ光が射してくるようになります。これは感激です。よく晴れた日でしたので、11月とはいえ汗ばんできます。見上げると、空が見える。10人ほどで1時間くらい伐採をしたのですが、すっかり開けたスペースが生まれました。こんな風に入って自然と生きてきたのかと、おおげさなことも考え、自然の中にいることが、うれしくなる、そんな体験をさせていただいた一日でした。

（文責・大島三津夫）



INDEX

NPO法人地域と協同の研究センターのこれまでから “協同の”未来を考える	1
地域でのつながりを追う 第7回東海交流フォーラムに向けて	4
山のくらしを支え合う 若者と共に地域力を高めて	7
研究センター理事からのメッセージ	8
「コープぎふの森・関」の森林整備活動を体験してきました！	8

2010年 12月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み、年会費には購読料が含まれています)
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>